

調査の概要

1) 調査の目的

日本では学力や勉強意欲の低下が問題となっている。国際的な視野でみるとどうなのか。こういう目的で「勉強」を取り上げることとした。

授業の形態、勉強の仕方や時間、勉学の態度、学校生活への評価などを通して、日本の特徴及び各国との異同をみる。

2) 調査方法

調査の時期、サンプルの数、調査方法などは下表のとおりである。

| | 日本 | アメリカ | 中国 | 韓国 |
|--------|---|--|---|--|
| 実施時期 | 2009年9月～ 11月 | 2009年9月～ 11月 | 2009年9月～ 11月 | 2009年6月 |
| 調査学校の数 | 12校 | 12校 | 24校 | 64校 |
| 調査地域 | 北海道 岩手県 茨城県 千葉県 東京都 山梨県 長野県 大阪府 岡山県 | Durham, NC DeWitt, NY Watertown, NY Chicago, IL Great Falls, MT Indianapolis, IN Charlotte, NC Idaho Falls, ID Liberty, MO Eugene, OR Gallup, NM | 大都市： 北京市、重慶市 中都市： 湖北省荊州市、 広東省佛山市、 小都市： 遼寧省瓦房店市 甘肅省臨洮市 各地域から2区（市 内、郊外）各区に2 校を抽出。 | ソウル、釜山、 大邱、仁川、 光州、大田、 蔚山、京畿、 江原、忠清、 全羅、慶尚 |
| 調査方法 | 集団質問紙法 | 集団質問紙法 | 集団質問紙法 | 集団質問紙法 |
| サンプル数 | 1316票 | 1022票 | 1870票 | 1965票 |

3) 調査の協力機関

中国青少年研究中心、韓国青少年政策研究院

4) 調査内容

- ・ 授業の形態・授業形態の好き嫌い
- ・ 勉学態度
- ・ 学校生活への評価
- ・ 勉強の仕方と時間
- ・ 勉強へのプレッシャーとストレス
- ・ 成績に対する意識と親の態度
- ・ 読書とパソコンなどの利用

5) 調査対象者の属性

今回の調査は勉強に関する内容で、学科により、その勉強方法がだいぶ違うのである。比較しやすいため、調査対象者を主に普通科の生徒にしている。

調査対象者の属性は下表のとおりである。

| | | 日本 | 米国 | 中国 | 韓国 |
|----|----------------|------|------|-------|-------|
| 性別 | 1. 男 | 46.9 | 52.5 | 48.5 | 54.0 |
| | 2. 女 | 52.9 | 47.3 | 51.4 | 46.0 |
| | 無回答 | 0.2 | 0.2 | 0.1 | 0.0 |
| 学年 | 1. 高1 (米:10th) | 39.1 | 30.1 | 33.0 | 28.0 |
| | 2. 高2 (米:11th) | 27.4 | 21.1 | 33.5 | 37.6 |
| | 3. 高3 (米:12th) | 33.4 | 48.8 | 33.4 | 34.4 |
| | 無回答 | 0.1 | 0.0 | 0.1 | 0.0 |
| 学科 | 1. 普通科 | 92.0 | 97.6 | 100.0 | 100.0 |
| | 2. 専門学科(職業学科) | 8.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| | 3. 総合学科(米:その他) | 0.0 | 2.4 | 0.0 | 0.0 |
| | 実数(人) | 1316 | 1022 | 1870 | 1965 |

6) 調査結果の要約

授業の形態

中国は「教科書中心的な授業」「受験の準備で、問題集でたくさん練習させる授業」が多いうえに、「生徒によく発言させる授業」「グループで課題を考える授業」「多様な教材・教具を使う授業」「観察力や応用力を高める授業」も相対的に多い。アメリカでは、「多様な教材・教具を使う授業」と「個人で調べる授業」が他国に比べて多く、観

察力や応用力を高める授業も中国に次いで多い。他方、教科書中心的な授業やグループでの学習は少ない。韓国と日本は、教科書中心的な授業のほかに、大半の項目で肯定率が低い。

授業形態の好き嫌い

米中では、学校外での見学・体験と多様な教材・教具を使う授業の人気の高い。韓国では、特に教科書中心的な授業は嫌われている。反対に日本では、教科書中心的な授業が好きという者が4カ国中最も多い。

好きな教師

教えてもらっている先生が「好き」という評価が最も高かったのがアメリカであり、日本は最も低かった。

好きな教師のタイプについて、中国では、教える内容のレベルの高さと指導の熱心さが評価される反面、冗談を言い合えるような教師は好まれない。アメリカでは、冗談を言い合えるような教師、知識の豊かな教師、指導に熱心な教師、えこひいきのない教師が好まれる。韓国と日本は、冗談を言い合えるような教師が最も好まれ、教育内容の高さや指導の熱心さはそれほど求められていない。

好きな教科

中国がほとんどの教科で好きという回答が最も多い。韓国と日本は、全体に好きだという回答は少ない。

勉強態度

日本の高校生でもっとも特徴的なのは、授業中のテイク・ノートである。他の諸国の2～3倍の肯定率を示す。私語や飲食、メールを打ったりする“内職”は少ないが、授業中の積極的な発言や自主的に調べることなどは4カ国中最も少ない。アメリカでは、授業中の私語や飲食、あるいは“内職”が比較的自由に行われている。中国の高校生は、授業中の居眠り、私語、飲食、“内職”が最も少なく、ボーッとしていることも少ない。授業中の発言にも家庭学習にも積極的で、授業外でも自分で積極的に調べる。韓国の高校生は、授業中きちんとノートを取ることが少なく、居眠りも比較的多いが、私語や飲食、“内職”、ボーッとしていることなどは少ない。しかし、積極的な発言が4カ国中最も少ない。

わからないことがあった場合、アメリカでは「先生に聞く」が最も多く、友人、家族、ネットもかなり多かった。中国では友人が最も多く、本などで調べるのも多かった。韓国では先生に聞くことはそれほど多くなく、友人や本などが比較的多かった。日本の高校生は、先生にも聞かず友人に聞くことも比較的少なく、本もネットもあまり見ない。そのままにしておく、という回答が4カ国中最も多かった。

学校生活への評価

日本の高校生は、4カ国中最も学校生活を楽しいと答えているが、あまり誇りには感じていない。生活への張り合いは最も低い。選択科目を増やすことには消極的で、世の中で役に立つ勉強に関しては、4カ国中最低であった。

アメリカと中国は、学校生活をそれほど楽しいとは感じていないが、学校に誇りを持ち、選択科目を増やすことを強く望んでいる。特に中国は、「世の中で役に立つ勉強をしたい」という要求が強く、日本の3倍以上の強い肯定率を示している。クラスでは競争する雰囲気も助け合う雰囲気も強い。韓国は、米中とは多くの項目で逆である。学校生活は比較的楽しいが、誇りも張り合いも感じていない。学校外の方が楽しいと感じ、転校したい気持ちも比較的強い。クラスの中では競争する雰囲気も助け合う雰囲気もそれほど強くない。

現在している勉強への評価

アメリカは、「入試だけに役立つ勉強」「働く上で役立つ勉強」、中国は、「働く上で役立つ勉強」「社会人としての基本的勉強」という評価は高かった。韓国では、「いやでもしなければならない勉強」「入試だけに役立つ勉強」という認識が強い。

日本の高校生は、実質的な効果があまり評価していない同時に、競争や入試のための勉強という見方もしない。

学校生活で大切なこと

日本では「部活動に熱中すること」「友達に好かれること」の肯定率が高い反面、「クラスのリーダーになること」「優れた先生に出会うこと」にあまり関心を示していない。アメリカと中国は、先生の指導に従うこと、受験科目を重点的に学習することで高い肯定率を示す。また、中国では、優れた先生と出会うことが飛び抜けて高い。韓国では「親友を作ること」「特技となるものを獲得すること」「自分の特徴を発見すること」の肯定率が高い。

勉強時間

中国では宿題に非常に多くの時間を費やしているのに対し、韓国では宿題以外の学習時間が非常に長い。日本の高校生は、宿題に関してもその他の学習に関しても4カ国中最も勉強時間が短い。

勉強の仕方

日本は、試験の前にまとめて勉強するという回答が多く、自分で調べよう、他の方法でもやってみよう、実際に応用しよう、という気持ちが最も低くなっている。アメリカでは、「教えられたとおりに勉強する」「勉強を実際に応用する」が4カ国中最も高い。中国の特徴は、参考書をたくさん読み、問題意識を持ってできるだけ自分で考

えようとするところにある。韓国では、試験の前にまとめて勉強するという回答が最も多かった。

勉強へのプレッシャー

勉強へのプレッシャーは中国が最も感じている。日本も7割弱が肯定している(「とても感じる」+「まあまあ感じる」)。

プレッシャーの内容は、アメリカでは親の期待に次いで先生の期待が大きく、中国では親の期待が最大で、次いで自分の願望、友達との競争、家庭の状況と続く。韓国では、就職状況が4カ国中最も多く挙げられている。一方、日本では、親の期待も先生の期待も競争もあまり感じていないが、唯一、勉強の内容が難しい、というのが4カ国中最も高い回答率を示した。

プレッシャーの結果

アメリカでは、眠れず、授業をサボり、ものを壊す、という行動が顕著で、中国は、落ち込み、いらいらする。韓国の高校生は、劣等感を持ち、学校を休みたい、退学したいと思い、人をののしり、生活に絶望すると回答している。日本の高校生は、落ち込み、いらいらし、学校を休みたいと思うが、あまり実際の行動にいたることはない。

いらいらしたり絶望したりする原因に関する問には、中国が、成績と家族を挙げているのに対し、韓国では成績、日本では成績の他に友人関係が顕著であった。

成績に対する親の態度

子どもの成績に対する父親の関心が日本は際立って低い。母親の関心も4カ国中、日本が最も低い。

読書やパソコンなどの利用

読書が好きという回答では、中米日韓の順で高かった。

日本の読書好きと答えた高校生が選んだジャンルで多かったのは、小説、マンガ、ファッション誌で、少なかったのは自然系、サイエンス系、歴史系の読み物だった。

また、ネット検索をしたり学習したりレポート作成したりといったことにパソコンを使っている高校生の割合は、圧倒的にアメリカが多い。日本の高校生のパソコン利用率は極めて低い。その代わりに、携帯によるネット利用は他国より多い。